

[教育特集論文]

小学校教員に求められる力についての 一考察（1）

中学・高校時代に関する実態調査から

山本 陽子*

Required Knowledge for Elementary School Teachers —Based on Fact-finding Surveys of Keiai and Other University Students—

Yoko YAMAMOTO

We are now in the second year of our elementary school teacher training course at Keiai University. As a former elementary school teacher, I have been considering what should be required of prospective schoolteachers in terms of fundamental knowledge. This might be rather broad as a topic. But focusing on their pre-college years, I would like to reveal what could enhance their motivation for further studies. This study was based on fact-finding surveys taken at Keiai University and two other universities. The list of questions concerned the following: (1) extracurricular activities at junior and senior high school, (2) how to spend after-school hours: home, preparatory schools, special training schools, such as music school, and (3) entrance examinations for high school and those for university.

*やまもと・ようこ：敬愛大学国際学部准教授 音楽教育

Associate Professor of Music Education, Faculty of International Studies, Keiai University.

はじめに

本学国際学部「地域こども教育専攻」という小学校教職課程が設置されて2年目となった。小学校の教員になりたいという本専攻の学生が、4年間で何をどのように身につけていくことがこれからの教育に大切であるかを探り、それを大学の学びの中に取り入れていきたいと考える。

そのために「小学校教員に求められる力」とは何か、という大きなテーマを掲げた。今後もさまざまな角度からこのテーマに迫っていきたい。今回はまずその第一段階として、大学に在学している学生の実態を知ることから始めようと考え、学生の中学・高校時代を、以下の3点から調査することにした。

- ① 部活動などの授業以外の課外活動について
- ② 家庭での学習や塾・習い事について
- ③ 高校受験や大学受験・進学について

これらと合わせて、学生自身が現在必要と感じている力を「自分にほしい力、あるといいと思う力はどんなものか」という質問で問うた。これは、学生が考えている力と実際に学校現場で必要とされる力について対照・分析し、検討することができると考え、行ったものである。

調査の対象は、敬愛大学国際学部国際学科地域こども教育専攻1・2年の学生である。本学の実態をより客観的にとらえられるように、同世代の比較として、都内国立A大学小学校教員養成課程3年の国語選修・理科選修の学生、私立B大学子ども学科2年の学生にも協力を求め、同じ内容の調査を実施した。

この調査の目的は、通常の授業や学生との会話の中で直感的に感じられる学生の「学び」に対する取り組みの違いは、中学・高校時代の生活の中にあるのではないかと、ということデータをデータとして検証することである。また学生が「自分にほしい力」を考えることで自分自身を振り返り、これからの自分の目指す方向性をイメージするうえでのきっかけとなることを意

図している。さらにこれらのことから、学生の実態や思いを読み取り、小学校教員に求められる力についての考察に生かすことができると考える。

情報化、国際化、価値観の多様化など社会の激しい変動の中、先行き不透明な社会では、学齢期を超えて生涯学び続けることが求められる。この生涯学習を支えるものは一人一人の主体的な「学び」であり、「生きる力」である。本論文では調査を項目別に整理・集計し、分析を行い、そこから見えてくる問題を探り出すとともに、長年経験してきた小学校での子どもたちの実態についても、生涯学習の視点から考察する。

調査の実施対象について

対象とした本学の学生は、国際学部国際学科地域こども教育専攻の1年31名と2年26名である。1年は前期最後の合同ゼミ時、2年は前期最後の必修科目「初等音楽科指導法」の授業時に、無記名で実施した。表1のように回収率は全体で82%である。未回収の学生は前期最終のゼミ・授業の欠席者であるといえる。

地域こども教育専攻の2年の学生とは、前述の「初等音楽科指導法」、1年後期「初等音楽概説」の2つの必修科目で、全員（1年次長欠の1名除く）と授業を通してかかわっている。またその多くが昨年度の「合唱」「合奏」（通年科目）や、昨年度後期・本年度前期開講の「共生支援教育」を履修しており、「1年基礎ゼミ」で担当した学生以外にも、地域こども教育専攻1期生として日常的に深いかかわりをもっている。

1年の学生は、前期音楽関係の必修科目が開講されていないため、「1年基礎ゼミ」と「共生支援教育」「合唱」「合奏」科目を通して、31人中22名とかがわりがある。これらの科目を履修していない9名については、氏名と顔が一致する程度の関係である。

A大学小学校教員養成課程の国語選修・理科選修の3年の学生とは、「音楽科研究Ⅰ」という科目でかかわった。これは各選修の1クラスを3つに分けて、3人の教員がアシスタント・ティーチャー（TA）とともに、小学

表 1 調査総数と内訳

K大学(小学校教職課程)

学年		総数	回答数	回収率	大学内割合	全体の割合		人数	割合
1年	男子	17	13	76%	56%	36%	男子	23	49%
	女子	14	13	93%			女子	24	51%
	計	31	26	84%					
2年	男子	15	10	67%	44%				
	女子	11	11	100%					
	計	26	21	81%					
合計		57	47	82%					

国立A大学(小学校教員養成課程)

専攻学年		総数	回答数	回収率	大学内割合	全体の割合		人数	割合
国語 3年	男子	9	9	100%	47%	40%	男子	27	53%
	女子	19	15	79%			女子	24	47%
	計	28	24	86%					
理科 3年	男子	17	18	106%	53%				
	女子	10	9	90%					
	計	27	27	100%					
合計		55	51	93%					

私立B大学(保育士・幼稚園教諭課程)

学年		総数	回答数	回収率	大学内割合	全体の割合		人数	割合
2年	男子	4	4	100%	74%	24%	男子	4	13%
	女子	21	19	90%			女子	27	87%
	計	25	23	92%					
	参考	8	8	100%	26%				
合計		33	31	94%					
総合計		145	129	89%	129	100%		人数	割合
							男子	54	42%
							女子	75	58%

校共通教材等のピアノ伴奏を中心にした伴奏法の授業を行うものである。それぞれ27～28名という人数で、各時間の前半3分の1は全体での講義や実習、後半3分の2はTAとピアノの個人指導を中心に実施した。毎時間カードを使って学生一人一人と交流を図っていたので、週1時間のかかりではあるが、講義だけで接するのとは違う親密感がある。

国語選修の調査用紙の回収率が悪いのは、1限の授業で、欠席・遅刻回数がすでに規定に達した者が最後の授業に参加しなかったことによるもので、単位が履修できた学生全員から回答を得た。ただここでの調査では、男女の人数がどうしても合わなかった。国語選修・理科選修とも名簿記載の人数より、調査用紙回答では男子が1名多く女子が1名少なくなっている。該当に○をつけるという方法であったので単純な間違いかもしれないが、男女に分けて回答を求める必要が本当にあるのかという反省にもなった。なお集計はすべて調査用紙に書かれた性別で行っている。この「音楽科研究Ⅰ」の授業は小学校教員養成課程の必修科目であるが、今回理科選修には中学校教員養成課程在籍の4名が副免許取得のために履修している。

B大学子ども学科2年の学生とは、「音楽Ⅱ」の授業でかわり、前年度後期「音楽Ⅰ」から継続して担当している。授業内容はピアノの個人レッスンで、学生との距離は近い。直接担当しているのは25名であるが、同じ時間帯にレッスンしている先生が自分の担当の学生にも調査用紙を配ってくださり、回収したのが「参考」の8名で、全員女子学生である。

この子ども学科は保育士・幼稚園教諭1種免許・社会福祉士受験資格が取得できる学科で、敬愛大学に地域こども教育専攻コースが新設された07年度に、短大より大学になってスタートした学科である。学生たちの様子から、ピアノ実技を必須とする幼稚園教諭よりも保育士や社会福祉士を目指す学生の方が多いような印象を受ける。経験に応じてのピアノ指導であるが、全くピアノに触れたことのない学生が「音楽Ⅰ」の半期でバイエル終了、「音楽Ⅱ」でブルグミュラー5曲と幼児の歌の弾き語り15曲という、かなりハードな課題をこなした。

以下本文では、敬愛大学をK大学と記載する。

〈実施した調査内容〉

『小学校教員に求められる力』について研究を進めていきたいと考えています。大学4年間でどのようなことを学ぶことが、小学校の現場に出たときに大切なのかを探り、大学での実際の授業を通して実践していくことが目的です。

そこで、その第一段階としてみなさんが大学に入る前の学習等について、実態を把握したいと思います。情報はデータとして集計し、他の目的に使うことはありませんので、よろしくご協力ください。なお、この調査のまとめは12月に発行される敬愛大学国際研究に掲載する予定です。

*該当するものに○をつけてください。 1年 2年 3年 男 女

中学時代について

- 1 部活動や生徒会活動をしていましたか？ はい いいえ
(何を 何年間 週何回 時間等)
- 2 自宅で勉強(宿題含む)をしましたか？
した(毎日 時間くらい) ときどき しない
宿題 予習 復習 興味ある事柄他()
(該当するもの全部に○をつけてください)
- 3 学校・自宅以外で、塾(勉強)や習い事をしていましたか？
(すべて書いてください)(何を 週何回 何時間等)

高校時代について

- 4 高校はどうやって決めましたか？
またどのような方法で入学しましたか？(推薦・一般入試など)
- 5 部活動や生徒会活動をしていましたか？ はい いいえ
(何を 何年間 週何回 時間等)
- 6 期末試験等の前に、どのくらい勉強しましたか？(期間 時間 内容等)
- 7 大学に入学するために勉強しましたか？ はい いいえ
(勉強した教科・内容 期間 時間等)
- 8 この大学に入学した理由
- 9 自分にほしい力、あるといいと思う力はどんなものですか？

*ご協力ありがとうございました。不安や希望・質問などありましたら裏面に自由に書いてください。

調査の集計・分析と考察

1 中学時代

(1) 部活動・生徒会活動

表2のように、中学時代に部活動等をしてきたのは、全体で95%と高く、そのほとんどが卒業まで続けている。その活動の内容は、表3にまとめた。3大学ともテニス（テニス・ソフトテニス・硬式テニスを含む）が運動部の中でトップである。以下バスケット、バドミントン、バレーボール、サッカーと続く。19の活動のうち13が運動部でその人数の総計は92名、活動内容が不明のもののおよそ半分は運動部と思われるので、中学校での部活動は8割が運動部ということができる。いわゆる文化部のほとんどがそれぞれ1名か2名の中で、格段に人数が多いのが吹奏楽部である。文化部全体の4分の3の人数で、全体でも2番目となっている。

あとでこの部活動が高校でどのように変化していくかを見ていくが、部活動入門期の中学校の活動としては「テニス」と「吹奏楽」が大きな位置をしめているようである。なお2つ以上の活動を回答した学生については一番始めに書いたもののみを集計している。

次に活動時間を見てみると、K大学では部活動をしていた学生は、不明2名と幽霊と書いた1名の計3名以外はすべて週5日以上「毎日」である。週7日あるいは6日、日曜以外毎日と学校の休日にも試合でなくとも恒常的に活動があったと記述したものは21名もいる。1日の活動時間だけ記述したものもいるので、少なくとも千葉県内の中学校では休日の部活動は当たり前、部活動に休日はないのが一般的な状況であるといえる。

また1回あたりの活動時間では、平日は放課後2～4時間と3時間前後が最も多く、暗くなるまでと書いた学生も2名いた。休日は大半が4時間または半日であるが、1日という回答もあった。また、3名はこれ以外に朝の練習時間も挙げている。

表 2 中学時代

1 部活動や生徒会活動をしていましたか？

K大学					全体	はい	いいえ	計
1年	男子	12	1	13	男子	50	3	53
	女子	13	0	13	女子	73	3	76
	計	25	1	26	計	123	6	129
	割合	96%	4%	100%	割合	95%	5%	100%
2年	男子	9	1	10				
	女子	10	1	11				
	計	19	2	21				
	割合	90%	10%	100%				
A大学								
国語 3年	男子	9	0	9				
	女子	15	0	15				
	計	24	0	24				
	割合	100%	0%	100%				
理科 3年	男子	16	1	17				
	女子	10	0	10				
	計	26	1	27				
	割合	96%	4%	100%				
B大学								
2年	男子	4	0	4				
	女子	18	1	19				
	参考	7	1	8				
	合計	29	2	31				
	割合	94%	6%	100%				

A大学でも、活動日数、週6日以上が20名いる。また活動時間も平日19時半まで、あるいは5時間というものもあり、全体としてはやはり3時間程度が最も多い。休日も平日と同じくらいの活動時間が多いが、6時間あるいは9時～18時というものもある。ここではK大学では見られなかった「時々」や「週3日」などもあり、これは中高一貫校に多く見られる。また練習時間を朝・昼・放課後と書いたものもあり、文字通り部活漬けの毎日を過ごしたものもある。

B大学では、週6日以上は活動は11名である。平日の活動時間はやはり3時間前後が多いが5時間としたものもある。休日も平日と同じ程度の活動時間が多いが、6～7時間、8時半～17時というものもある。ここでも週3

表3 中学 部活動内容

	活動	K大学	A大学	B大学	計
1	テニス	7	10	9	26
	テニス	4	5	2	11
	ソフトテニス	3	3	7	13
	硬式テニス	0	2	0	2
2	吹奏楽	6	8	4	18
	吹奏楽	6	7	4	17
	ブラスバンド	0	1	0	1
3	バスケット	6	6	2	14
4	バドミントン	3	3	3	9
5	バレーボール	5	1	2	8
5	サッカー	3	3	2	8
7	野球	5	0	2	7
	野球	4	0	0	4
	軟式野球	1	0	0	1
	ソフトボール	0	0	2	2
8	卓球	2	4	0	6
9	陸上	2	2	1	5
10	剣道	1	3	0	4
11	柔道	1	1	0	2
11	美術	0	1	1	2
13	水泳	0	1	0	1
13	バトントワリング	0	1	0	1
13	ハンドボール	0	0	1	1
13	演劇	0	1	0	1
13	パソコン	1	0	0	1
13	生物	0	1	0	1
13	書記局	0	1	0	1
20	不明	2	3	2	7
21	なし	3	1	2	6
	計	47	51	31	129

日あるいは4日という記述があり、週の中で部活動が休みの平日があったことがうかがえる。

以上を通して、中学校における部活動はその内容はともかく、時間的な束縛が非常に長く、中学生の生活の中に大きなウエイトを占めていることを再認識した。単純に計算して、平均的な活動時間を1日3時間、週5日の活動とすると1週間に15時間である。通常の教科授業は1週間に28時

間である。中学校で学ぶそれぞれの教科は国語や英語のように配当時間数の多いものでも週3～4時間である。音楽の授業は2・3年では週に1時間、年間で35時間である。吹奏楽部の部活動は1ヵ月足らずで1年分の音楽の授業時数をはるかに超えることになる。これらのことから部活動がいかに長時間行われているかがわかる。

中学校の部活動には、顧問の教師の存在が大きい。外部のコーチや監督を招聘しているところもあるであろうが、公立中学校の場合はまず考えられない。とするとこの膨大な部活動の時間を教師は生徒とともに過ごしているということになる。平日夜7時まで生徒とともに部活動をしていれば、教師は自分の教材研究や授業の準備をする時間は十分には取れない。休日も試合や練習があれば出勤して引率・指導をするであろう。ほっと一息つく間もないというのが実態で、教師も生徒も教科の学習に注ぐ力が希薄になってしまうのではないか。

もちろん、部活動を3年間継続して行うことによる身体的・精神的なメリット、また技術的な向上や友達とのかかわりなどの面での意義は大きい。また顧問の教師のすばらしい指導力や人間性に触れ、かけがえのない経験となることもあるであろう。しかしこの中学校生活の長時間の部活動によって、本来この時期に必要なゆっくり考える時間や本を読む時間、自分を見つめる時間がなくなってしまうことも事実である。

身体を動かすことと同じくらいこの時期にはやはり頭を使うことが大切である。部活動が楽しければ生徒はそちらに夢中になるであろうし、勉強が苦手な部活動に逃避してしまうこともあるだろう。この時期に必要なのは部活動のように指導者のもと、集団で動く活動だけではないはずで、一人でじっくり自分や社会のことを考えたり、学んだりする時間を確保することをもっと大切にしなければいけない。

この過剰とまで思われる部活動は、一時、中学校が荒れ、「小人閑居して不善を為す」で、生徒を暇にすると悪いことをするといった考えがもとになって、半ば強制的に強化されたように思う。一日の大半の時間を学校で過ごし、部活動でくたくたになれば、勉強はしなくなるかもしれないが、

非行に走るエネルギーも暇もなくなると考えた。この時期の生徒は有り余るエネルギーと不安定さをもっているため、それをどこかで昇華させることが必要である。

大会の試合やコンクールへの参加は、目標がわかりやすく、生徒を一つにすることができるので、教師は授業よりも生徒の心をとらえて指導がしやすいとも考えられる。そのうえ、大会やコンクールでよい結果を残せば、校内だけでなく外部にも高く評価される。多感な難しい時期の生徒を教科の学習指導で導くよりも部活動に力を入れるほうがよいと考える教師もあると思われる。部活動に力を注げば教師も生徒もそれだけ授業へのウエイトは減ることになり、中学校での「学び」は第一義の座を奪われているのではないだろうか。

(2) 自宅での勉強

「自宅でのどのくらい勉強したか」という問いに対して、「しなかった」(表4右から2番目)と回答した学生はK大学、B大学とも約半数にのぼる。この勉強には宿題も含むとしたので、半数もが「しなかった」という回答をしたことに驚く。1年ゼミの授業で中学校時代の家庭での学習について聞いたことがある。その際に「中学校では宿題はなかった」と多くの学生が答えた。小学校とは違い、教科担任制の中学校では宿題は出しにくい。授業中に答え合わせができるような宿題ならばいいが、提出させるようなものであれば、教員は短期間にそれを見てコメントや検印を押すという作業をしなければならない。週2回授業があれば次の時間までの間は短いし、その数も1クラス分ではなく同一授業を行う学年の全員分、複数学年を担当していればさらにその数は増す。

これは私が音楽専科教諭として勤務していた立場と似ているので、限られた時間内の作業の大変さはよく理解できる。生徒は宿題を提出すれば、教師がきちんとその宿題を見てコメント等を書いてすぐに返してくれることを期待するし、宿題を出した教師にはその義務がある。またそうしなければ、宿題をするモチベーションは途端にさがってしまう。

宿題の話のときに一人の学生が次のような話をした。中学校の担任がと

表 4 中学時代

2 自宅でのくくらしい勉強(宿題含む)しましたか？

K大学		内 容						勉強の時間							人数	
		宿題	予習	復習	興味	計	0.5時間	1時間	1.5時間	2時間	3時間上	計	しなかった			
														人数		割合
1年	男子	4	1	2	0	7	0	1	0	3	3	7	6			
		57%	14%	29%			1		3			46%				
	女子	7	4	1	0	12	0	0	1	3	0	4	6			
		58%	33%	8%			0		4			46%				
計	男子	11	5	3	0	19	0	1	1	6	3	11	12			
		58%	26%	16%			4%		27%		12%	42%	46%			
	女子	2	0	0	0	2	1	1	0	0	0	2	7			
		100%				2		0				70%				
2年	男子	9	3	3	0	15	1	1	0	3	0	5	3			
		60%	20%	20%			2		3			27%				
	女子	11	3	3	0	17	2	2	0	3	0	7	10			
		65%	18%	18%			4		3		33%	48%				
内 容													勉強の時間		しなかった	
A大学	男子	宿題	予習	復習	興味	計	0.5時間	1時間	1.5時間	2時間	3時間上	計	しなかった			
		5	0	3	2	10	1	1	0	1	1	4	4			
	50%		30%	20%		2		1				44%				

国語3年	女子	12	5	2	1	20	3	4	1	1	1	4	10	4	15
		60%	25%	10%	5%		7		5%	2		7	1	27%	
	計	17	5	5	3	30	4	5	1	2	3	9	14	8	24
		57%	17%	17%	10%		38%		13%				58%	33%	
	男子	11	3	3	0	17	0	7	0	3	3	7	11	6	17
		65%	18%	18%			7		3				35%		
理科3年	女子	7	2	6	0	15	1	2	0	4	4	3	7	2	10
		47%	13%	40%			3		4				20%		
	計	18	5	9	0	32	1	9	0	7	7	10	18	8	27
		56%	16%	28%			37%		26%				67%	30%	

B大学		内 容										勉強の時間			人数
		宿題	予習	復習	興味	計	勉強の時間					3時間上	計		
							0.5時間	1時間	1.5時間	2時間	3時間上				
	男子	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	2	4
	女子	10	2	1	0	13	5	2	0	0	0	0	7	11	19
	参考	4	1	1	0	6	0	2	0	0	0	1	3	4	8
	計	15	3	2	0	20	9	9	0	0	0	1	10	17	31
		75%	15%	10%			29%		0%			3%	32%	55%	

ても厳しい先生で毎日「家庭学習」を宿題にして、点検をしたという。「家庭学習」用のノートがありそれを担任に提出するのだが、その内容は全く生徒の自由だったようだ。学期の終わりにはこの「家庭学習」の量によって、担任の先生からご褒美があったという。この学生はこの担任の先生のおかげで「家庭学習」を毎日続け、内容はともかく、家庭で「学ぶ」という習慣を身につけることができたといえよう。教師も授業を担当している生徒すべてに宿題を出してそれを点検することは授業の合間の作業で時間的に大変であるが、担任しているクラスの生徒の「家庭学習」ノートの点検であれば、毎日のホームルーム時を利用することが可能である。

またそのときに、英語は単語ぐらい調べる予習をしていかないと授業がわからないでしょうと聞くと学生から意外な返事があった。英語の授業には単語の時間というのがあって、授業時間内に単語を調べる時間が設定されているという。その時間に自分で辞書を使って調べるのだというが、従来は当然家庭で行っていた予習の学習である。しかし、このような時間を設定しないと英語の授業そのものが成立しないということなのかもしれない。ただ反対にこのような時間を設定することが、生徒が家庭で学習をしなくしている原因の一つになっているともいえる。

これに対してA大学では、家庭での学習を「しなかった」という回答は3人に1人である。K大学の2年女子も同じような割合である。部活動の時間は全体的に、K大学のほうがやや長めであるので、そのこととも多少関係があるかもしれない。ただ、A大学の「しなかった」という回答の中には、宿題はすべて学校の休み時間などに済ませたというものがあった。部活動に忙しく家庭での学習時間がなかなか取れないということであろう。また、勉強の内容として、宿題以外では復習が多く、「自分の興味ある事柄」があるのも特徴である。授業で学習した内容はすぐに自分のものにしてしようとする態度が身につけているということがいえるのではないだろうか。

勉強の時間については、家庭での勉強を「した」と答えたものの中での数なので特に大きな違いは読み取れない。部活動の長さからも家庭での学

習時間は1日1～2時間程度確保するのがやっとというところであろう。しかし、この時期に短時間でも家庭での学習を習慣として身につけることができたかどうかはその後大きな差になってくる。

この質問は、複数回答で、「しなかった」に○をつけながら、内容の「宿題」に○をつけていたり、内容の項目に○がついていても、時間の記述がなかったり、また内容も複数回答であるので、数値的な整合性はない。

(3) 学校・自宅以外の塾（勉強）や習い事

中学生は前述のように、部活動の時間が長いので、小学生ほど塾や習い事はないのではないかと予想していた。結果は表5である。

表5 中学時代

3 学校・自宅以外で、塾（勉強）や習い事をしていましたか？

K大学		1年		2年		計	していた中での割合	全体からみた割合
		男子	女子	男子	女子			
学習関係	塾	8	9	5	5	27	73%	77%
	英語		3	2	1	6	24%	
	公文				1	1		
	珠算		1		1	2		
	小計	21		15		36		
芸術関係	ピアノ		1		4	5	16%	23%
	音楽				1	1		
	書道	1	2		2	5	14%	
	工作							
	小計	4		7		11		
運動関係	水泳	1		1		2	14%	11%
	空手	1				1		
	柔道	1				1		
	剣道	1				1		
	卓球							
	バレエ							
	サッカー							
	小計	4		1		5		
合計		13	16	8	15	52		
1人当たり数		1.3	1.6	1	1.667	1.405		
していた		10	10	8	9	37	79%	
していない		3	3	2	2	10	21%	
計		26		21		47		

表 5 続き

A大学		国語3年		理科3年		計	していた中 での割合	全体から みた割合
		男子	女子	男子	女子			
学習関係	塾	4	7	6	4	21	66%	49%
	英語		2			2	13%	
	公文							
	珠算		1	1		2		
	小計	14		11		25		
芸術関係	ピアノ	1	6	4	2	13	44%	37%
	音楽		1			1		
	書道		2	2	1	5	16%	
	工作							
	小計	10		9		19		
運動関係	水泳		1	2		3	19%	12%
	空手		1			1		
	柔道							
	剣道							
	卓球			1		1		
	バレエ				1	1		
	サッカー							
	小計	2		4		6		
合計		5	21	16	8	50		
1人当たり数		1.25	1.75	1.455	1.6	1.563		
していた		4	12	11	5	32	63%	
していない		5	3	6	5	19	37%	
計		24		27		51		

全体として7割くらいが塾や習い事をしていたと答えている。塾に関しては高校受験を意識した3年からという答えが多かった。

内容を「学習関係」「芸術関係」「運動関係」に分類したところ、K大学、B大学では「学習関係」の塾や習い事が圧倒的に多いが、A大学では比較的「芸術関係」が多い。部活動で運動部が多いせいかわ、習い事の「運動関係」は1割程度と少ない。意外に思ったのは、3大学とも同じくらいの比率（15%前後）で書道（習字）を習っていることである。教員を目指すということと関係しているのかもしれないが、美しい字が書けることは大きな自信にもつながり、学校現場でも大いに役に立つであろう。塾や習い事を

表 5 続き

B大学		2年			小計	計	していた中 での割合	全体から みた割合
		男子	女子	参考				
学習関係	塾	1	13	5	19		61%	71%
	英語	1	1		2	3	13%	
	公文							
	珠算		1		1			
	小計	2	15	5	22			
芸術関係	ピアノ		4	1	5	6	25%	35%
	音楽		1		1			
	書道	1	1	2	4	5	21%	
	工作		1		1			
	小計	1	7	3	11			
運動関係	水泳		1		1	3	13%	10%
	空手							
	柔道							
	剣道							
	卓球							
	バレエ							
	サッカー	1	1		2			
	小計	1	2	0	3			
合計		4	24	8	36			
1人当たり数		1.333	1.6	1.333	1.5			
していた		3	15	6	24	77%		
していない		1	4	2	7	23%		
計		4	27		31			

「していた」学生の平均個数は1.5前後で、一人が1つか2つの塾か習い事をしていたことになる。

また「していない」と答えた学生は、K大学、B大学では2割強（5人に1人）であるのに対して、A大学は37%（約3人に1人）と多い。これはA大学には、中高一貫校の割合が多いこと、また特に「学習関係」が少ないのは、中高一貫校には高校受験がないこと、塾に行かなくとも一人で勉強する方法や習慣が身につけている生徒が多いことなどからであろう。

(4) 高校入試

「15の春を泣かせるな」という題目のもとに高校入試がいわゆるペーパーテストの一発勝負からさまざまな方法に変更されてきた。団塊の世代やそのジュニアの世代など人数の多い年代では、必然的にいろいろな場面で競争があり、高校入試も大変で、希望の高校に入学するために高校浪人をするケースもあった。しかしいまは生徒の人数も少なく、特にこだわらなければ、だれでも高校に入学することができる。

高校入試についての回答は表6にまとめた。一般入試と推薦入試に分けて集計したが、結果はK大学とB大学がほぼ同じ割合になった(図1)。

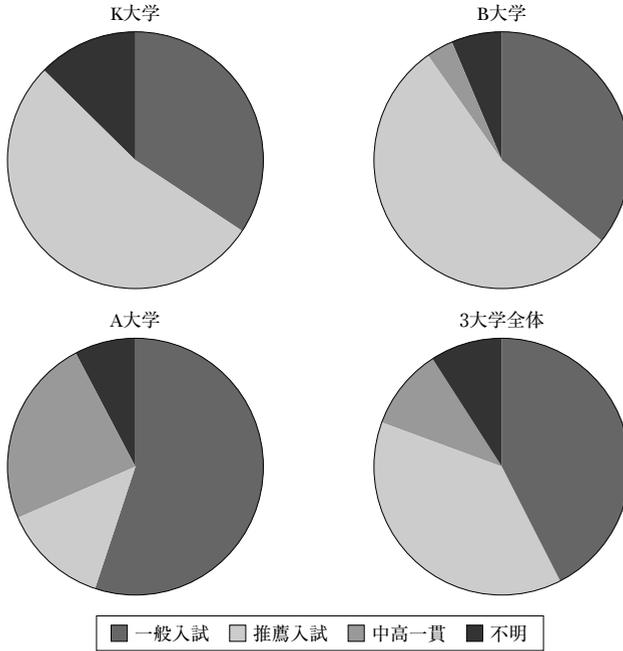
K大学の推薦25名の内訳は、千葉県独自の特色化選抜という制度で8名、そのほか部活推薦、スポーツ推薦などの推薦が17名で、うち1名が特待生

表6 高校入試

4 高校はどのような方法で入学しましたか？

大学	学年等		一般入試	推薦等	中高一貫	不明	計
K大学	1年	男子	6	5	0	2	13
		女子	3	8	0	2	13
	2年	男子	2	8	0	0	10
		女子	5	4	0	2	11
	計		16	25	0	6	47
割合		34%	53%	0%	13%	100%	
A大学	国語3年	男子	5	1	2	1	9
		女子	8	3	2	2	15
	理科3年	男子	10	3	3	1	17
		女子	5	0	5	0	10
	計		28	7	12	4	51
割合		55%	14%	24%	8%	100%	
B大学	2年	男子	4	0	0	0	4
		女子	5	12	1	1	19
		参考	2	5	0	1	8
	計		11	17	1	2	31
	割合		35%	55%	3%	6%	100%
総計			55	49	13	12	129
割合			43%	38%	10%	9%	100%

図1 高校入試について



の学費免除である。一般入試は16名、中には特色化選抜で落ちて一般入試で入ったという1名がいる。その他、入試の方法が書かれていない不明が6名ある。B大学では、特待推薦、自己推薦やAOなどの記述も見られ、中高一貫校は1名である。

A大学は、一般入試と推薦入試の比率が他の2大学と逆転する(図1)。中高一貫校も4分の1にのぼり、推薦は7名、14%と低い。中高一貫校は小学校の段階で中学入試を経験していると考えられるので、8割は高校入学までに入学試験を経験しているといえる。

図1の3大学全体をまとめたものを見ると、一般入試と推薦入試がほぼ同じ4割ずつくらいで、1割が中高一貫校、あとは不明である。中高一貫校は、これまでは国立大学の附属か私立にしかなかったが、ここ数年、公立の中学校や高校にこの中高一貫校を開設する動きが目立ってきている。今後はこの中高一貫校の割合が次第に増えていくものと思われる。

どのようにして高校を選んだのかについてまとめたのが、表7-1~3である。学生の書いたことばをそのまままとめた。

ここで高校入学の方法を問うたのは、いわゆる受験勉強をしたかどうかを知るためである。推薦入試という制度が高校にもあることは知っていたが、それが千葉県の場合、特色化選抜として多い高校では入学者の50%にまでのぼっているということは知らなかった。特色化選抜を今回推薦と同じ枠で整理したが、県公表のデータで見ると倍率が2倍を超えているところも多いので、楽に入学できるという制度ではないようである。ただいわゆる学科テストは課せられず、面接や自己表現、作文などが試験内容になっている。

日々の中学校生活をまじめに過ごしていれば高校に入学できるという制度の考え方自体は正当である。このような制度は生徒数の減少と相まって、中学校で部活動を一生懸命にしたり校内の中間や期末試験でまずまずの成績を取っていたりすれば、部活推薦や特色化選抜で高校に入れるといった道を確認していったのであろう。しかし、このような制度が広く取り入れられたことが中学校の部活動を助長し、中学校での「学び」を希薄にしている一因であるとはいえないだろうか。

表 7-1 高校選択の理由

K大学

<p>一般入試 16名</p>	<p>英語が苦手だったので、英語のコースのある地元の学校 高校を見学して決めた 公立で偏差値で決めた 特色化でおちて一般入試 公立は一般と自己推薦 私立は一般入試 自分がやりたい部活で決めた 自宅から通える進学校 自分の学力の上を目指すつもりだった 自分の実力を伸ばそうと思い高い所に行くためにがんばった 自分の能力にあわせて 単位制 ともだちと決めた 場所 もっと上を目指していたが10月位に断念 人生の中で一番頑張って勉強した理由記述なし 4名</p>
<p>推薦等 25名</p>	<p>11名 家から近いから 2名 学力と通学時間等で 高校側からの誘い 自宅から近く兄も行ってたから 少人数制と国際という部分に魅力を感じて 私立で特待生として入学すると授業料免除だったから 入れるとこで 部活が強かったから 理由記述なし 2名</p> <p>部活 部活動推薦 部活動で決めた</p> <p>スポーツ スポーツ推薦 部活で決めた スポーツ推薦 サッカー推薦</p> <p>特色化 推薦 勉強も部活もできるどころ 選抜 早く入れるところ 選抜 校舎 総合選択制 選抜 高校の先生のアドバイスとオープンキャンパスで 選抜 見学してみてもの雰囲気 偏差値 部活 選抜 部活動をそこでやりたかったのと学校の雰囲気 選抜 いとこが通学していた 自分の学力にあった 選抜 祖父が無理矢理</p>
<p>AO</p>	<p>AO入試 自分が行けるか行けないかくらいの所でサッカー部が強くないとこ</p>
<p>入試方法 不明</p>	<p>第一志望不合格で私立の高校に入学 興味のある学科がある 大学進学の実績がよい 自分のいける一番偏差値の高い 自転車でいけるところ 適当でした 制服 施設 資格 近くてレベルの低いところ 自分で通えるところ</p>

表 7-2 高校選択の理由

A大学

<p>一般入試 28名</p>	<p>とりあえず県でトップだからうけた 総合高校で色々な科目を選択できるので 進学実績 親が決定した 学力 親の希望 校風制服がないこと 学力 通いやすさ 学力と学校の雰囲気 通いやすさ 学力に合わせて 学力レベルや学区外であることから決定 学校を見に行つて 通いやすさ 大学進学率 部活動 弓道部があったから 家から近い 当時の自分では上位校だった 景色が良かった プールマラソン大会がない 県で一番優秀な学校だったから 校風がよく家に近かったから 自分で行きたいところを探した 自分の学力 大学も考えていたので進学校を選んだ 受験附属へ 進学校に絞つて 近さ 自分に合う 部活が県有数の強豪校だったから 普通校で妥当 少し上の学校を片っ端から見学し、自分が3年過ごしたい雰 囲気の場所を選んだ 雰囲気や校風 偏差値と校風 文化祭に行つて気に入つた 吹奏楽部が強いところ 偏差値 理由記述なし 3名</p>
<p>推薦等 7名</p>	<p>推薦 サッカーが強い都立 推薦 自分で決めた 推薦入試 学力 部活行事の盛んさ 雰囲気をみて 推薦入試 成績と交通 女子高 推薦入試 立地条件 進学実績 校風 推薦入試(面接) 当時のレベルに合つたところ近場を選んだ スポーツの特待生で</p>
<p>中高一貫校 12名</p>	<p>中高一貫校 男子5名 中高一貫校 女子7名</p>
<p>入試方法 不明</p>	<p>スカートが可愛くて家から近かつた 尚且つ自分の学力でも行けた 文武両道だったから 学力に合う高校を選んだ 学区で自分の学力より少し上を目指して頑張つた</p>

表 7-3 高校選択の理由

B大学

一般入試 11名	親が決めた 学力がちょうどだったこと 近かった 学校がきれいなど見学して決めた 自分の行きたいところを探した スポーツ推薦のつもりが一般入試 理由記述なし 6名
推薦等 17名	行けそうなところで選んだ 環境 校風にひかれた 指定校 自己推薦 私立単願推薦 偏差値 スポーツ推薦 2名 成績で決めた 単願推薦 部活や大学を考えて(附属校) 近いから 進学力が良いから 特待推薦で 高校の先生から電話を受け バレーボールの強さで決めた 部活をやりたかったから強い学校へ 理由記述なし 4名
中高一貫校 1名	中高一貫校
入試方法 不明	私立の併願 併願

2 高校時代

(1) 部活動・生徒会活動

中学校では95%がしていた部活動が、高校ではどのようになっていったかを調べた。結果は表8である。K大学1年男子に途中退部者が多いが、全体として8割以上が高校でも部活動を継続している。その内容は表9にまとめた。中学校では19だった活動内容が33に広がっている。そのせいもあってか、人数が多いのは中学校と同じ「テニス」「吹奏楽」であるが、その実数はテニスで半分、吹奏楽は3分の2に減っている。運動部の新たな活動としては「弓道」「ラグビー」「ラクロス」「ワンダーフォーゲル」など、文化部として目立つのは「軽音楽」で、K大学で4名、他にも2つ目以降に2名が挙げている。いわゆるバンド活動と思われるが、高校生ら

表 8 高校時代

5 部活動や生徒会活動をしていましたか？

K大学		はい	途中退部	いいえ	計
1年	男子	6	4	3	13
	女子	12	0	1	13
	計	18	4	4	26
	割合	69%	15%	15%	100%
2年	男子	9	0	1	10
	女子	9	0	2	11
	計	18	0	3	21
	割合	86%	0%	14%	100%
合計		36	4	7	47
割合		77%	9%	15%	100%

A大学		はい	途中退部	いいえ	計
国語3年	男子	9	0	0	9
	女子	14	1	0	15
	計	23	1	0	24
	割合	96%	4%	0%	100%
理科3年	男子	14	0	3	17
	女子	9	0	1	10
	計	23	0	4	27
	割合	85%	0%	15%	100%
合計		46	1	4	51
割合		90%	2%	8%	100%

B大学		はい	途中退部	いいえ	計
2年	男子	4	0	0	4
	女子	16	1	2	19
	参考	6	0	2	8
	合計	26	1	4	31
	割合	84%	3%	13%	100%

全体		はい	途中退部	いいえ	計
	男子	42	4	7	53
	女子	56	2	8	66
	合計	108	6	15	129
	割合	84%	5%	12%	100%

表9 高校 部活動内容

	活動	K大学	A大学	B大学	計
1	テニス	3	5	5	13
	テニス	1	2	0	3
	ソフトテニス	1	1	4	6
	硬式テニス	1	2	1	4
2	吹奏楽	2	6	4	12
	吹奏楽	2	5	4	11
	プラスバンド	0	1	0	1
3	バスケット	5	4	2	11
4	バドミントン	4	4	1	9
4	サッカー	3	4	2	9
6	バレーボール	3	1	3	7
6	野球	5	0	1	6
	野球	3	0	0	3
	硬式野球	1	0	0	1
	マネージャー	1	0	0	1
	ソフトボール	0	0	1	1
8	陸上	1	3	1	5
9	軽音楽	4	0	0	4
10	卓球	1	2	0	3
10	水泳	0	2	1	3
	水泳	0	2	0	2
	マネージャー	0	0	1	1
10	ハンドボール	0	0	3	3
	ハンドボール	0	0	1	1
	マネージャー	0	0	2	2
13	剣道	0	2	0	2
13	美術	0	1	0	2
13	合唱	2	0	0	2
13	演劇	1	1	0	2
17	弓道	0	1	0	1
17	柔道	0	1	0	1
17	軽運動	1	0	0	1
17	ワンダーフォーゲル	1	0	0	1
17	ラグビー	0	1	0	1
17	ラクロス	0	1	0	1
17	体操	0	0	1	1
17	チア	0	0	1	1
17	生物	0	1	0	1
17	英語 (ESS)	1	0	0	1

表 9 続き

17	華道	0	1	0	1
17	茶道	0	1	0	1
17	邦楽	0	1	0	1
17	珠算	0	0	1	1
17	女子高風委員会	0	1	0	1
17	生徒会	1	0	0	1
17	YMCAボランティア	0	1	0	1
34	不明	2	3	0	5
35	なし	7	3	4	14
	計	47	51	31	129

しい活動といえるであろう。また「合唱」（これは中学校で出てこなかったのがむしろ不思議な感じがする）や「華道」「茶道」「邦楽」などの日本文化の活動内容も一人ずつではあるがでてきている。当然ではあるが、中学校に比べ内容が多岐になり、マネージャーや邦楽部を創部したという記述もあり、生徒の主体性が感じられる活動が増えてきている。

表10-1～3（48～53ページ参照）は中学校と高校の部活動の変化を個人のレベルで整理したものである。中学校の部活動で数の多かった順に高校でもその活動を継続したものを1番から並べている。中ほどの高校継続欄では、高校でも中学と同じ内容の部活動を継続したものは○、途中で退部したものは△、そして中学校と部活動の内容が変わったものは×、空欄は高校での活動のないもの、内容が不明のものである。高校部活等欄には高校で活動が変わったもののみ部活動の内容を記載した。一番右の活動時間は、中学校よりその活動時間が増えているものを◎、中学校と同程度を○、減少しているものは△で表している。※は活動時間の記述がなくわからないものである。

中学校での部活動歴がなく、高校になってはじめてものが2名。中学・高校を通して部活動していないもの4名。高校になって部活動を止めたものは7名である。

テニスは半減しているが、サッカーは全員が継続、バスケットも続けているものが多い。吹奏楽を継続した8名は活動時間を増しているものが多

い。テニスは取り組みやすい活動であるが、集団というより個人プレーの要素が強く、実力がないと続けにくいのではないかとと思われる。高校でテニスから音楽系（軽音楽・合唱・吹奏楽等）やESS、華道など文化部に変わったケースが見られる。

(2) 期末試験等の勉強

これは高校で行われる定期試験の際にどのような勉強をして臨んだかを質問したものである。ゼミの学生が以前、自分には基礎学力がないと話していた。どういうときにそう思うのかと問うと先生や大人の人と話していると感じる、ということであった。高校の成績は悪くなかったけれど、高校は試験前にその範囲だけをひたすら覚え、試験が終わったらすぐに忘れてしまうような勉強しかしていなかったから、といていた。このことを踏まえて、中学時代では日常の家庭学習についての質問をしたので、高校時代は定期試験の前にどのような勉強をしていたかということをつたねた。

その結果は表11-1~3(54~58ページ参照)である。予想としては部活動の休み期間になる1~2週間前から1日4~5時間くらい(ふだんの部活動の時間+ α)ではないかと考えていた。それに対してA大学は9割がほぼ予想通りであった。K大学・B大学の想定内は6割というところで、前日や一夜漬けというのが2割あり、特にK大学では「勉強した覚えがない」「してない」など試験の前に準備をしなかったという回答が1割あった。A大学にも前日や一夜漬けというものもあるが、特にテスト勉強はしなかったが、毎日の予習復習をコンスタントにやっていたという記述がある。試験前だからといってとりたてて勉強はしないというのと「してない」というのは明らかに違う。

学習は習慣であり、集中力が必要である。日常は大半の時間を部活動に費やしていても、限られた時間の中で毎日短時間でも学習するという習慣と試験前には集中して勉強するというけじめが大切であるが、そのどちらも身につけないまま大学に進学してきてしまったものがある。(57ページへ続く)

表10-1 中学校と高校の部活・生徒会等 活動内容とその変化

K大学 1年・2年

番号	中学校部活・生徒会等		性	年	頻度	高校継続		高校部活等		活動時間
	テニス	バスケット				高校継続	JRC 灘土研究部			
1			女	1	毎日	○				◎
2			女	2	毎日	○				◎
3			女	2	毎日					○
4			女	1	毎日	○				○
5			女	1	毎日	○	スポーツ推薦			○
6			女	2	毎日	○				◎
7			女	1	毎日	○				◎
8			女	2	毎日	○	部活推薦			◎
9			女	2	毎日	○				◎
10			女	1	毎日	○				○
11			男	2	毎日	○				◎
12			男	2	毎日	○				◎
13			男	1	毎日	○		陸上		◎
14			男	2	毎日	○				◎
15			男	2	毎日	○	スポーツ推薦			◎
16			男	2	毎日	○	サッカー推薦			◎
17			男	1	毎日	○			体育委員会	◎
18			女	1	毎日	○				○
19			男	1	毎日	○				○
20			男	2	毎日	△		ソフトテニス(退部)	軽音	○
21			男	1	毎日	△		硬式野球(退部)	JRC 体育委員会	△
22			女	1	毎日	×		演劇部		○
23			女	2	毎日	×		合唱	生徒会	○
24			男	1	毎日	×		軽音		○

25	1	テニス			男	1	毎日		×	軽音			
26	8	卓球	生徒会		女	2	毎日		×	硬式テニス		書道	○
27	5	野球			男	1	毎日		×	バドミントン			○
28	3	吹奏楽	卓球		女	2	毎日		×	バドミントン			○
29	2	バスケット			女	1	毎日		×	バドミントン			○
30	1	ソフトテニス	陸上卓球		女	1	毎日		×	野球部マネージャー			○
31	1	テニス			女	1	毎日		×	ESS(英語)			△
32	3	吹奏楽			女	1	毎日		×	音楽部(合唱)			△
33	4	バレーボール			女	2	毎日		×	軽運動部		自然科学部	△
34	2	バスケット			女	1	毎日		×	生徒会			△
35	1	ソフトテニス			男	1	毎日		×	軽音楽(退部)			
36	7	バドミントン			男	1	毎日		×	バスケット(退部)			
37	11	柔道	生活委員会		男	1	毎日		×	軽音楽			※
38	3	吹奏楽	サッカー		男	2	毎日		×	ワンダーフォーゲル			※
39	13	不明			男	1				不明			○
40	13	不明			男	1				不明			○
41	10	剣道			男	1	毎日		×	なし			
42	9	陸上			男	1	毎日		×	なし			
43	4	バレーボール			女	1	毎日		×	なし			
44	7	バドミントン			女	2	幽霊		×	なし			
45	14	なし			女	2				なし			
46	14	なし			男	2				なし			
47	14	なし			男	1				なし			

表10-2 中学校と高校の部活・生徒会等 活動内容とその変化

A大学 3年

番号	順	中学部活・生徒会等		科	性	頻度	高校継続		活動時間
		部活	生徒会等				部活等	継続	
1	1	硬式テニス		国	女	毎日		○	○
2	1	ソフトテニス		理	男	毎日		○	○
3	1	テニス		理	女	毎日	一貫	○	○
4	2	吹奏楽		国	女	毎日		○	○
5	2	吹奏楽		理	女	毎日	一貫	○	○
6	2	吹奏楽		国	男	毎日		○	◎
7	2	ブラスバンド		国	女	毎日	一貫	○	◎
8	3	バスケット		理	男	毎日		○	△
9	3	バスケット		理	女	毎日		○	△
10	3	バスケット		国	男	毎日		○	○
11	3	バスケット		理	女	毎日		○	○
12	4	卓球		国	男	毎日		○	△
13	4	卓球		理	男	毎日		○	○
14	5	剣道		国	女	4日	一貫	○	○
15	5	剣道	生徒会	理	男	毎日		○	○
16	6	サッカー	生徒会	理	男	毎日		○	△
17	6	サッカー		理	男	毎日		○	○
18	6	サッカー		理	男	3日	一貫	○	◎
19	7	バドミントン		国	男	4日		○	△
20	7	バドミントン	生徒会	国	女	毎日		○	△
21	8	陸上		国	女	毎日	スポーツ特待	○	◎
22	8	陸上		理	男	3日		○	◎
23	9	柔道		国	男	毎日	一貫	○	○
24	10	水泳		理	男	毎日	一貫	○	○

表10-3 中学校と高校の部活・生徒会等 活動内容とその変化

B大学 2年

番号	順	中学部活・生徒会等		性	頻度	高校継続		高校部活等		活動時間
		部活	生徒会等			継続	部活等			
1	1	ソフトテニス	執行委員会	女	毎日		○			○
2	1	ソフトテニス		女	4日		○	硬式テニス		○
3	1	ソフトテニス		女	毎日		○			○
4	1	ソフトテニス		女	3日		○			△
5	2	吹奏楽		女	毎日		○			◎
6	2	吹奏楽		女	毎日		○			◎
7	2	吹奏楽		女	毎日		○			○
8	3	バドミントン		女	4日	一貫	○			○
9	4	サッカー	(課外サッカークラブ)	男	1日		○			◎
10	4	サッカー		男	毎日		○			○
11	5	ソフトボール		女	4日	スポーツ推薦	○			◎
12	6	バスケット		男	毎日		○			○
13	6	バスケット		女	毎日		○			○
14	7	バレーボール		女	毎日		○			◎
15	7	バレーボール		女	毎日	推薦	○			◎
16	8	ハンドボール		女	毎日	部活推薦	○			○
17	9	陸上		男	4日		○			◎
18	1	ソフトテニス		女	毎日		△	体操	ソフトテニス	△
19	1	テニス		女	3日		×	ハンドボールマネージャー		◎
20	11	なし		女			×	チア		◎
21	10	美術部		女		特待推薦	×	珠算部		◎
22	5	ソフトボール		女	毎日		×	ハンドボールマネージャー	ダンス	○
23	2	吹奏楽		女	毎日		×	ソフトテニス		○
24	1	テニス		女	毎日		×	吹奏楽		○

表11-1 高校時代 期末試験等の勉強
K大学

期 間	人数	時 間	人数	内 容 等	人数
1ヵ月前から	1	1日2～3時間	1	復習	1
		6時間～	1	教科書写しなど	1
		5時間	1	ノートまとめプリント(自作の)	1
2週間くらい前から	10	1日2・3時間	1	復習(全科目)	1
		2時間位	3	全科目	1
		毎日30分～2時間	1		
		毎日電車で	1		
		気分次第	1		
1・2週間前から	1	2・3時間 3日前は5・6時間	1	E…内容の復習と単語 H…ひたすら自己流	1
		まる1日	1	全教科の復習	1
		6時間	2	提出物	1
		5時間	1	授業中のノート、プリントの復習	1
1週間前から	12	平日は2・3時間 休日は5・6時間	1	試験内容	1
		数時間	1	わからない所だけ中心にやった	1
		3・4時間	1		
		3時間	2		
1週間前 部活が休みの時	1	2・3時間	1		
部活でほとんど勉強できなかった	1	1日2時間位	1		
数学のみ1週間前から他はテスト前日	1				
前日一夜漬け	2				
前日	6	3時間	2	次の日のテストの科目	1
		2・3時間	1	全体的にさらっと見る	1
		2時間ちょいくらい	1		

当日	1	1~2時間くらい	1	ノートから問題を予測 教科書の太字の暗記	1
期間記入なし	7	8時間位	1		
		3~4時間	1		
		2時間	2		
		1時間	1		
ほどほどに	1				
してない	1				
あまりしていない	1				
あんまり勉強した覚えがない	1				
勉強してない	1				
無記入	1				

表11-2 高校時代 期末試験等の勉強
A大学

期 間	人数	時 間	人数	内 容 等	人数
3週間前から	1	1日3時間	1	苦手な分野の復習	1
		1日6時間	1	問題集をやったり	1
		1日5時間ぐらい	1	ひたすら問題を解いたりノートをとったり	1
		平日3時間 休日8時間	1	各教科の問題集 ノートまとめ	1
		1~6時間じよに増える	1	テスト勉強	1
		1日4時間	2	テスト内容を勉強	1
		平日1~2時間 休日3~4時間	1	試験範囲の内容	1
		2~3時間	1	復習	1
		2時間ぐらい	3	英語、数学を中心に	1
		1日1.5時間程度	2	数学、英語はコンスタントに継続していた	1
1~2週間前から	3	1日3~4時間	1	各教科先生に応じて	1
				テスト範囲	1
部活がテスト休みに入ってから	1	毎日2時間程度 前日は時間の限り 一夜漬け毎日	1		
		1日6~10時間	1	復習を少しずつ	1
		1日4~6時間	1	テスト勉強	2
		1日5時間	1	ほとんどテスト範囲の復習	1
		1日4・5時間程度	2	テスト範囲のノートをとったり問題を解いたり	1
		3~5時間	1	学校でもらったワークを元にひたすら解いて覚える	1
		夜4時間	2	ノートのまとめや単語確認	1
		3時間ぐらい	1	暗記・内容確認	1
		3時間 前日は4時間睡眠ぐらい	4	授業内容の確認	1
		2~3時間	1	主に暗記	1
1週間前から	23		1	各教科	1

期 間	人 数	時 間	人 数	内 容 等	人 数
		1日2時間くらい	1		
		1~2時間	2		
		どんなにやっても1教科1時間まで	1		
		夜	1		
テスト前のみ	1	3~4時間	1	全教科	1
前日	2	5~6時間	1	毎日の予習復習がメインの教科	1
ほぼ一夜漬け	1	徹夜	2	全てを	1
無記入	2				
○	1				

また定期試験前に勉強するのは、指定された試験範囲の限られた単元や内容である。それを短期間でひたすら暗記して試験に備えるということは何度繰り返しても、試験の終了とともに消えてしまうであろう。にわか勉強の暗記では身についた知識にはならない。またこのような勉強は外圧的なもので、自分の必要感や意欲・興味から行うものではないので、その結果にだけ意味があるように考えがちになる。このような勉強では、学ぶ楽しさを味わったり、自らの思考を深めたりすることにはならず、その知識も積み重ねていくことができない。

表11-3 高校時代 期末試験等の勉強

B大学

期 間	人数	時 間	人数	内 容 等	人数
1ヵ月前	1	6～8時間	1		
2週間前	2	2時間			
		前日とかは深夜おそくまで			
		1日6時間ぐらい	1		
		5時間	2	復習	2
		毎日3～4時間	1	各教科	1
1週間前	15	3時間ぐらい	4		
		2時間	2		
		各教科1時間程度	1		
		少しずつ	1		
3日前	1	6～7時間	1	ひたすら暗記	1
		2～3時間	1	好きなことは多く嫌いなものはざっくりと	1
前日	4	3時間ぐらい	1	見直し	1
		1～4時間	1		
		寝ないでした	1		
一夜漬け	1				
		5～6時間	1		
期間記入なし	4	1日4・5時間	1		
		4時間ぐらい	1		
		2時間	1		
試験前に少々	1				
できるだけ	1				
無記入	1				

(3) 大学入学のための勉強

A大学は国立大学であるので、全員「大学入試センター試験」の5科目7～8教科の受験準備をしている。その勉強の期間は高校に入学した当初から3年間というもの、2年から、あるいは3年の1年間、秋からの4ヵ月などいろいろであるが、それなりに準備し、計画的に学習していた様子が読み取れる。

K大学、B大学の大学入学のための勉強は表12にまとめた。

いわゆる大学受験のための勉強をしたと思われるものは半数以下で、大学入学のための勉強を特にしていないと答えたものが、それぞれ6名、11名いる。小論文や面接などの練習をしたというものは指定校やAO入試の準備というものが多し。願書を書くのが入学前にした唯一のことと書いたものもある。

第1希望の大学が他の大学であったものはそれぞれ志望大学の受験科目の勉強をしたが、現在の大学だけを希望してきた学生は小論文や面接の練習をただけで、いわゆる学科の試験準備は何もしなかったというのが実態のようである。

千葉県内の公立高校訪問で、高校に入学してくる生徒の半数が一般入試を経験しないで入学していることを聞いた。高校の進路指導担当の教諭は「高校に推薦で入学してきた生徒は大学も推薦を希望しています。高校に

表12 大学入学のための勉強(複数回答)

内 容	K大学		内 容	B大学	
5教科7科目(センター対策)	9	22 47%	5教科7科目(センター対策)	2	9 29%
3教科 国・英・社(数)	9		3教科 国・英・社(数)	4	
英語(英単語含む)	2		英語(英単語含む)	2	
数学	2		予備校	1	
小論文	9	14 30%	小論文	5	8 26%
面接	5		面接	3	
指定校	9	19 40%	指定校	8	10 32%
AO	10		AO	2	
系列校					
特にしていない	6	13%	特にしていない	11	35%

一般入試で入った生徒は、大学こそは推薦で行きたいと思っているのです」と話していた。

受験勉強の弊害が問題になって、入試の方法も大きく変化してきた。偏差値ばかりが重視される選抜方法や学校の輪切りランク付けによる過度の受験競争がよくないことは明らかである。しかし、いまは特別な大学以外、希望する大学に比較的楽に入学することができるし、少子化で学生集めそのものが難しい大学側の事情もある。早い時期に入学が決まる推薦やAO入試は大学側にとっても学生の確保手段としてありがたい存在になっている。

受験勉強は特殊な勉強で、主として知識の量や作業の速さを求めるものが多く、その勉強自体には特に意味があるとはいえないが、希望の大学に入学するための受験勉強は受験生が必要を感じて自分から取り組む勉強であることは確かである。校内の定期試験のように限られた範囲の予想される問題ではない広範囲の勉強は、その内容が表層的であっても勉強の習慣をつけ、幅広い知識を受験生に与え、試験の後もある程度はその人の教養という形で残るであろう。

大学進学率が50%にもなろうという現在、大学生の学力はバラバラである。特に学科試験を課さない、厳しい選抜のない大学ではその学生の学力に大きなばらつきが生じる。そしてその原因は、一朝一夕のものではなく、中学校時代から、さらには小学校時代からの積み重ねであり、一人一人の基本的な学習習慣の有無にあるといえる。

(4) 大学入学の理由

大学入学の理由をたずねた結果が表13-1～3である。大学に入学する際にどれほどのモチベーションをもっているかが、4年間の大学生生活の充実度になってあらわれると考える。

3大学とも将来希望した職業に就くための資格が取得できるからとはっきりとした目的意識をもって入学してきた学生が多い。K大学は調査対象の半数が1年、A大学は3年ということも考慮しなくてはならないが、特にK大学は昨年度小学校の教職課程が新設されたので、小学校教員1種免

表13-1 大学入学の理由(複数回答)

K大学

		理 由	人数	割合	
1		小学校教員免許取れる	11	33	70%
		教員免許が取れる	8		
		教師になるため	2		
		先生になりたかった	2		
		英語が指導できる小学校教員になりたい	2		
		地域こどもがあるから できたから	2		
		小学校教員免許1種が取れる	1		
		小学校教師になるため	1		
		教職課程があったから	1		
		教職を取りたくて	1		
		小中高の教員資格をとるために少し他大学より単位が少なくていいから 指定校推薦リストの中で教員養成の学科があった	1		
2		自分の夢を叶えられる場と思ったため	1		2%
3		国際学部があったから	1		2%
4		系列だったから	2		4%
5		近いから	1	5	11%
		自宅から通える	3		
		通学に便利で学校の雰囲気にかれた	1		
6		自分のレベルに合わせて	1		2%
7		先生にすすめられて	5		11%
8		試験を受けたくなかったから	1	12	26%
		第1志望に落ちたから	1		
		他の大学に落ちたから	1		
		千葉大に行くのが怖かったから	1		
		千葉大に落ちたから	1		
		落ちて先生と相談して	1		
		希望する大学に縁がなかったから	1		
		すべり止め	2		
		こしかなかった	1		
		時間がなかった	1		
		うんわるく	1		

許取得、教員になりたいと回答した数が7割になっている。

「自宅から通える」「近い」などの環境面の答えも複数ある(巻末の参考資料「出身高校所在地」参照)。K大学では特に「先生にすすめられて」という記述が多く、高校の先生の進路指導も大きく影響しているようである。4分の1の学生は、K大学が第1希望ではなかったと記述している。

A大学は周りから見れば恵まれた教育環境だと思われるが、「親の希望」

表13-2 大学入学の理由(複数回答)

A大学

	理 由	人数	割合
1	教員になりたかったから	11	32 63%
	教員志望のため	3	
	小学校教員になるため	4	
	教員になって陸上を教えたいので	1	
	初等教員免許取得	1	
	教員免許が取れる	2	
	先生になりたい	3	
	教師を目指している	1	
	小学校の先生に興味をもって	1	
	小学校免許と特別支援の免許が取れる	1	
	国語の教師の資格が取れる	1	
	理科を専科とできるように	1	
	自分で生きていけるやりがいのある職業につきたかったから	1	
その当時教師って良いかも?!と思っていたから	1		
2	教育学部がある	1	11 22%
	教育に興味があったから	1	
	教育と理科をどちらも学びたかった	1	
	古文を勉強したかった	1	
	国語が好きだから	2	
	勉強の幅がある	1	
	理系だけじゃない	1	
	ある教授の下で勉強したかったので	1	
	しっかりとした技術が身に付く	1	
	昔からのあこがれだったので	1	
3	国立だから	9	18%
4	偏差値(がそれほど高くない)	4	9 18%
	あまり勉強しないで合格できそうだったから	1	
	学力	3	
	二次が1教科のみ	1	
5	家から近い	5	11 22%
	景色がよい 緑豊か	2	
	立地 キャンパスや人の雰囲気	2	
	芝のグラウンド	2	
6	一人暮らしがしたかったから	2	4 8%
	東京への憧れ 出たかった	2	
7	親の希望	1	3 6%
	センターで失敗したから	1	
	わからない 1回他大学に編入しようかと思った	1	

表13-3 大学入学の理由(複数回答)

B大学

	理 由	人数	割合
1	保育士になりたいから	3	10 32%
	保育の学科があったから	1	
	欲しい資格が取れるから	3	
	保育士、幼稚園教諭の資格がとれるため	1	
	保育士資格をとりたかった	1	
	保育系だから	1	
2	保育科で指定校があった	1	11 35%
	子ども学科があったから	4	
	子ども学科の指定校がもらえたから	1	
	指定校推薦があったから	1	
	指定校があったから	2	
	指定校	2	
3	自分の行きたい学部があったから	1	8 26%
	オープンキャンパスに来て良いと思ったから	1	
	きれいだから	2	
	9号館(子ども学科動物)を魅力的に感じたから	1	
	入れそうで楽しそうだったから	1	
	学校の雰囲気が良いと思ったため	1	
	家から近かったから	2	
4	成績にあっていたから	1	2 6%
	手を出せるレベル	1	
5	第一志望におちた	2	5 16%
	他の大学が受からなかったので	2	
	他に入れる大学が無いから仕方なく	1	

や「センターで失敗したから」と不本意に入学したと思われる学生が数名いる。本人がその環境を生かす気持ちがなければ、どんな環境であってもよい方向には進まない。反対に、本人がその気になれば、周りをまきこんでかなりのレベルに達することができるのではないだろうか。K大学では第1希望でなかった学生たちの多くが教員の免許取得のため、先生になるために真剣に学びながら、少人数の自由な温かい雰囲気を生かして、それぞれの持ち味を出してきている。

われわれ大学の教員は学生一人一人の思いを引き出し、育て、学生が常に自分で問題意識をもって学んでいくことをサポートすることが大切であると考えている。

何となく小学校の先生くらいにはなれるのではないかと漠然と考えて入学してきた学生であっても、実際に小学校を参観したりボランティア活動をしたり、介護実習などを経験することで、さまざまなことを感じ、体験的に学んでいくことができる。授業を通して教員の仕事の意味や理解を深め、学生一人一人が自分自身を見つめ直しながら、有意義な4年間の大学生活が過ごせるよう、導いていきたい。

自分にほしい力、あるといいと思う力

学生から一人平均1.35個の記述があった。学生の書いた言葉を生かして、表14にまとめた。整理するのに、どのようにまとめればよいか、またどの範疇にいれればよいか、なかなか難しかったが、「コミュニケーション」「積極性」「芸術的な能力」「集中力」「身体・運動能力」「教員としての力」「継続力」「判断力」「協調性」「学力」「語学力」「応用力」「自制力」「経済力」「超能力」「想像力」等、大きく18に分類してまとめてみた。

「とくになし」無記入等、ほしい力の記述のないものが全体で12%あった。3年のA大学では2名(4%)であるのに対し、人数の少ないB大学で7名(23%)、1年が半数のK大学では7名(15%)であった。これはまだ自分自身についてきちんと考えることができていない学生で、何がこれからの自分に必要かわからない、あるいはそのようなことは考えたことがないということではないだろうか。自分を見ているもう一人の自分の存在をつくるのが大人として生きていくためには不可欠なことであるが、このように自分を客観的にとらえることができないと「自分にほしい力」を考えることは難しいだろう。

この「ほしい力」に関しては、今後さまざまな機会を通して学生たちと直接話し合いながらさらにその内容を精査し、分析・考察していきたい。

表14 自分にほしい力、あるといいと思う力(複数回答)

		K大	A大	B大	計	
1	○ 社交性	1	1	0	2	26
	あがらない緊張しないこと	0	1	0	1	
	その場の空気の察知力	0	0	1	1	
	話題を広げる力	0	1	0	1	
	人を好きになること	0	1	0	1	
	誰とでも仲よくなる広い心	0	1	0	1	
	人と気軽に話せる力	0	1	0	1	
	知らない人と話せる力	1	0	0	1	
	○ 人の気持ちを察せる力	1	0	2	3	
	人の心を理解するまたしようとする力	0	1	0	1	
	相手の気持ちが読めるようになりたい	0	0	1	1	
	◎ コミュニケーション能力	1	3	0	4	
	自分の意見をしっかり言える	1	0	0	1	
	人前でも落着いて自分を表現できる力	0	1	0	1	
	人をまとめる力	0	1	0	1	
	人を集めるための何らかの力	1	0	0	1	
人を引き付ける力	1	0	0	1		
人間としての懐の深さ	0	1	0	1		
周りの空気を和ませられる力	0	1	0	1		
みかえりを求めない支えあい	0	0	1	1		
	小計	7	14	5	26	20%
2	○ 勇気	2	0	0	2	20
	気	1	0	0	1	
	○ やる気	1	0	1	2	
	高いテンション	0	0	1	1	
	◎ 物事をポジティブにとらえる力	1	1	2	4	
	◎ 積極性	1	1	2	4	
	○ プレッシャーに負けない強い力	0	2	0	2	
	○ 自信	0	2	1	3	
得意なものが一つでもほしい	0	0	1	1		
	小計	6	6	8	20	16%
3	☆ 楽譜が読める力	1	0	0	1	17
	○ ピアノを弾く力	2	1	3	6	
	☆ 歌唱力	0	2	1	3	
	芸術的センス	0	2	3	5	
	色彩感覚	0	1	0	1	
	空間把握能力	0	1	0	1	
	小計	3	7	7	17	13%
4	☆ 集中力	3	2	2	7	13
	効率の良さ	0	1	0	1	
	仕事の速さ	0	1	0	1	
	○ 記憶力	3	0	0	3	
	暗記力	1	0	0	1	
	小計	7	4	2	13	10%

表14続き

5	○	体調をよくする力	1	0	0	1	12
		丈夫な身体	1	0	0	1	
		健康な身体	0	1	2	3	
		高い身体能力	0	1	0	1	
	○	走力	0	0	1	1	
		体力	1	1	1	3	
		視力	1	0	0	1	
		身長	1	0	0	1	
		小計	5	3	4	12	9%
6		教員に必要な知識	1	0	0	1	11
		教員に必要な能力	1	0	0	1	
		教科の知識	0	1	0	1	
		子どもと正面から向き合って受け止める力	0	1	0	1	
		授業力	0	1	0	1	
		指導力	0	1	0	1	
		課題発見能力	0	1	0	1	
		文章力	0	1	0	1	
		演技力	0	1	0	1	
		表現力	0	1	0	1	
		声量	0	1	0	1	
		小計	2	9	0	11	9%
7	○	継続する力	1	0	1	2	10
		努力し続けられる力	0	1	1	2	
		持久力	0	1	0	1	
		根気	1	0	0	1	
		がまん力	1	0	0	1	
		忍耐	0	0	1	1	
		何事にも必死に取り組める力	1	0	0	1	
		サボらない姿勢	0	1	0	1	
		小計	4	3	3	10	8%
7	○	判断力	1	1	0	2	10
		冷静な判断力	0	1	0	1	
		鋭い洞察力	1	0	0	1	
		考える力	0	1	0	1	
		観察力	2	0	0	2	
		周りを見る力	0	1	0	1	
		落ち着き	1	0	0	1	
		用心深さ	0	1	0	1	
		小計	5	5	0	10	8%

表14続き

7	○	包容力	1	0	0	1	10
		協調性	0	2	1	3	
		おおらかさ	0	1	0	1	
		優しさ	0	1	1	2	
		素直な心	0	0	1	1	
		柔軟性	0	1	0	1	
		気のきく心	0	1	0	1	
		小計	1	6	3	10	8%
10	○	頭のよさ	1	0	0	1	9
		一般常識	1	0	0	1	
		学力	2	0	1	3	
		学才	0	1	0	1	
		才能	2	0	1	3	
		小計	6	1	2	9	7%
10	◎	会話力	2	1	0	3	9
		英語力	1	3	0	4	
		言語力	0	0	1	1	
		語学力	1	0	0	1	
		小計	4	4	1	9	7%
12	○	応用力	1	1	0	2	7
		実行力	1	0	0	1	
		行動力	0	1	0	1	
		発想力	1	1	0	2	
		創造力	1	0	0	1	
		小計	4	3	0	7	5%
13	○	はじめ	1	0	0	1	6
		自立する力	1	0	0	1	
		朝早く起きられる力	1	1	0	2	
		計画性	1	1	0	2	
		小計	4	2	0	6	5%
14	○	経済力	1	1	1	3	2%
14	○	魔法	1	0	0	1	3
		超能力	0	1	1	2	
		小計	1	1	1	3	2%
16	○	想像力	0	2	0	2	2%
17	○	何か足りないと感じたら努力し自分の力にする力	1	0	1	2	2%
18		広い視野	0	1	0	1	1%
		リーダーシップ	0	0	1	1	1%
		オールマイティにほどほどにこなす	0	1	0	1	1%
		どんなものもあって困らない	0	1	0	1	1%
		合計	61	74	39	174	135%
			130%	145%	126%	135%	

表14続き

	分かっていたら苦勞しない わからない 今の自分に満足しているわけではない とくになし	1 1 0	0 0 1	0 0 1	1 1 2	4
	小計	2	1	1	4	3%
	無記入	5	1	6	12	9%
	合計	7 15%	2 4%	7 23%	16 12%	12%
	総計 延べ数	68 145%	76 149%	46 148%	190 147%	147%
	アンケート人数	47	51	31	129	

小学校での学び

1 都会の小学校での問題

現在小学校では、「総合的な学習の時間」や「問題解決型」の学習を通して、子どもの主体的な「学び」を定着させることに力点を置いている。しかし成果がすぐには見えにくいというのに、このような力を伸ばすには教師の力量が大きく問われ、容易ではない。じっくりと腰を据えて学習する環境を整えにくい今の時代には、従来から行われてきた、教えてもらう・教える活動のほうが子どもにとっても教師にとっても取り組みやすく、わかりやすい面をもっている。経済協力開発機構（OECD）の学習到達度調査（PISA）⁽¹⁾の世界各国の学力調査結果から、日本の子どもの学力低下がマスコミに大きく取り上げられた。ゆとり教育がその原因のようにいわれ、文部科学省の軸足は大きくぐらついている。

既習の知識や技能を駆使して自ら課題を見つけ、解決しようとする力を身につけることはこれからの社会に生きるうえで何よりも大切なことである。しかし、この力を養う方法はいまだ確立できず、また繰り返しや積み重ねが必要な学習も宙ぶらりんになって、双方の成果が出せないまま、中

途半端になっている実態がある。

前回の学習指導要領改訂で教科内容のいわゆる精選が行われ、その内容が一律3割削減された。そしてそこに書かれている内容すべてが基礎・基本であるという文部科学省の見解が出され、すべての子どもたちが100点を取れるような指導が要請された。それまでの学習指導要領ではそこに書かれた内容以上の指導を認めていなかったが、学力低下の報道を受け、文部科学省は実態に応じて学習指導要領の範囲を超えた指導もしてよいと途中で修正をした。

ここでの問題は、何が本当に大切であるかということの吟味のないまま各教科の内容を一律に削減したこと、各教科がばらばらなままで教科横断的な観点からの精選が図られなかったこと、子どもたちが使う教科書が学習指導要領の内容の削減とともに薄くなってしまったことである。

学習の目標を掲げるとき、すべての子どもに満点をというのははじめから無理な設定である。すべての子どもがわかる課題では、すべての子どもの学習欲を満たすことはできない。中庸の子どもたちが8割わかることでよしとするのが集団の学習での基本である。残りの2割はその後の学習へつなげ、反復・繰り返していくことで、限りなく満点に近づけていく。最初の目標に対しての達成度は7～8割といえよう。文部科学省は全員に100点を求めているが、その100点はすでに3割削減されているのではじめから従来の70点である。つまりいま現場の子どもたちの学習は70点の7～8割、50～60点の力に留まってしまうことになる。

実際十数年前の学期末には、学芸会など大きな学校行事があったときなど、まだ単元が1つ残っているけれどどうしようという話題が職員室にのぼった。しかし現行の学習指導要領になってからは、年度末の1ヵ月くらい前にもう教科書は全部終わったというのをあちこちで聞いた。週5日制で授業時間が削減された以上に学習内容が減り、学校での学習は通り一遍の手ごたえの薄い内容になってしまった。

その一方で、情報化社会のいま、街は情報に満ちている。そんな中で、子どもたちは必要感をもたないままたくさんの知識や情報を注入されてい

る。子どもたちは知りたいという欲求をもつ間もなく、さまざまな刺激を受けている。それはおなかがすいていないのにたくさんの食べ物をおいしいから食べるといわれているようなもので、空腹であれば心からおいしいと思う食べ物であっても、おなかがいっぱいではそのおいしさを感じる事ができない。また子どもには子どもの嗜好にあった食べ物があり、それは大人と同じではない。子どもたちの発達段階を考慮せずに、いいものならばできるだけ早く、できるだけたくさん与えればいいという発想で、保護者や大人は子どもたちを直撃する。タイミングをあやまると効果がないばかりか大切なものよさもわからないまま、食べず嫌いのような拒否反応をおこしてしまうこともある。

いま私たちは、子ども自身が知りたい、学びたいという気持ちを感じる前に、たくさんの知識や情報を容赦なく注入してはいないだろうか。また、経験もなくできないのが当然である子どもに、はじめから完成したできあがり求めてはいないだろうか。大人の正解に対するこだわりや間違えることに対する許容度の低さが、子どもたちが本来もっているはずの伸びやかさや新しいものに取り組もうとする意欲、自信を奪っている。

昔は「井の中の蛙、大海を知らず」の言葉のように、子どもの生活圏は家族や学校・地域などの身近なごく限られた範囲にあった。ほめられたりしかられたりすることもこの中で行われ、その中に自分の居場所を見つけ、守られてきた。しかし今は情報があちこちから入るので、早い時期から自分が一番だと思っていたことがたいしたことでないことを知ったり、大人も子どもに対してもっともっとと要求がエスカレートしていつてしまったりする。地道な一步一步の子どもの成長がさまざまな情報によって阻害されてしまう。保護者がしっかりとした見識をもって子どもに接することができればよいのだが、大人であっても、教師も含めてなかなか自分自身でしっかりと立っていることができない。

学校は遊ぶところで勉強は塾ですといった図式が都会では当たり前のようになってきてしまっている。中学受験をしようという子どもは、公立の中高一貫校の増設とともに今後さらに増えていくであろう。進学塾に行

って熱心に中学受験を目指す子どもは、下校後の時間のほとんどをそれに費やし、夕食も弁当やファーストフードで済ませ、家庭でのだんらんの時間もない。夜遅く家に帰ってきたあとも塾の宿題をしたり、ゲームをしたりして寝るのは夜中。朝学校に来て寝不足ですっきりせず、授業に集中することができない。その上、クラスでの授業はすでに聞いたことのある簡単なことばかり。そこで学校が一番手の抜ける楽な場所となる。ただ友達とおもしろおかしく遊び、給食を食べて好きなことをすればいい場となり、本来の学ぶ場の意味を失ってしまう。

学校は同年齢の子どもが互いに違いを認め合いながら、みんなで学んでいく場である。理解力の高い子どもや早い子ども、発想の豊かな子どもの刺激を受けてクラス全員の学習が深まっていく。教師の指導力も大切ではあるが、子どもたち同士がかかわりあいながら学ぶものは大きい。本来授業で、主体的にリーダーとして重要な役割を果たしてくれるはずの子どもが、夜進学塾で根をつめて勉強をすることで、学校での学習から逃避してしまっている。このことは塾に行っていない子どもにとっても大きなダメージである。教師の努力にもかかわらず授業そのものが沈滞し、魅力のないものになる。学級全体の学習意欲が減退し、学習レベルの低下につながるほかない。

授業参観でこのような様子を見た保護者は学校の勉強だけでは心配に思い、子どもを塾に通わせる。塾ではみなが目標をもって難しそうな内容の勉強をしているので安心し、もう学校の学びには期待しなくなる。受験勉強では、覚えること、記憶力と作業の速さが鍵で、これらは訓練によってかなり鍛えることができる。受験という目的をもって熱心に取り組めば、相当の成果をあげることができる。このようにしてますます学校は学ぶ場としての意義を薄くしていってしまう。

2 学校と家庭

愛情と適切な世話がかけられ、受験はあくまでも個人的な事情と考える家庭の子どもは、塾での勉強に疲れていてもそれなりに学校生活もがんば

って過ごすことができる。しかし、塾に行かせていることで満足し、塾での勉強ばかりに関心をもっている家庭の子どもも多い。このような子どもがクラスに数人いることによって、授業がうまく進められないことがある。本来人間の集中力というものは、それほど続くものではない。ましてや子どもであり、学校外で4～5時間の集中を強いられれば、学校に来ては力はいらないのは当然といえよう。

また一方では、漢字はもちろん、ひらがなでさえもまともに書けない、九九もあやしいという子どもがいることも事実である。この原因はいくつか考えられるが、反復練習や集中力の不足とともに家庭・保護者の子どもに対する無関心が挙げられる。日常の生活の中で、子どもたちは常に大量の情報を浴びている。一つのことに集中することのできる時間が短くなり、次々と新しい刺激を求める生活は、腰を落ち着かせて学習する環境をつくりにくい。また、学校における反復練習の時間は、学校週5日制や校内の頻繁な会議、新しく入った「情報」や「外国語活動」などの授業によって、もはや確保しづらくなってきた。家庭では、両親ともが忙しく働いていたり、子どものことよりも自分の生活を優先する保護者も増えており、塾には行かせていても家庭で子どもの学習に気を配ったり、見てやったりする機会は減っている。

子ども自身が、自分が家族から気にかけているという感覚をもつことができない家庭環境では、学校で教師がいかに一人一人の子どもに気を配ってきめ細かな指導をしても、子どもに学習意欲をもたせ続けることは難しい。よい点数のテストをうれしそうに持ち帰っても、保護者から何の反応もなければ子どもは学ぶ楽しさを感じたり次への意欲をもったりすることはできない。「子どもの勉強のことはすべて学校にお任せしています」という保護者がいるが、学習の定着に家庭での学習や家族の称賛は欠かすことはできない。

3 学校での評価

学校が学びの場として認識されにくくなったことのもう一つの原因に評

価の問題がかかわっている。現在小学校では指導要録に合わせて、通常各教科の成績を2通りつけている。一つは「観点別学習状況」というもので、各教科おおむね4つの観点、①関心・意欲・態度、②思考・感受、③表現・技能、④知識・理解、からの評価で、それぞれについて「十分満足できると判断されるもの」A、「おおむね満足できると判断されるもの」B、「努力を要すると判断されるもの」Cの3段階で評価する。もう一つは各教科の学習状況について、小学校学習指導要領に示す各教科の目標に照らして、その実現状況を総括的に評価し、総合的に判断する3・2・1の3段階評定である。この3・2・1の3段階評定は3年生以上に行っている。これに行動の記録や出欠席などを加えて、通知表（通信表）などの形で保護者に知らせることが多い。

この「観点別学習状況」「3段階評定」とも、その区分は「十分満足できると判断されるもの」「おおむね満足できると判断されるもの」「努力を要すると判断されるもの」という3段階の絶対評価である。文部科学省の説明では学習指導要領の内容は最低基準であるので、全員が「おおむね満足できると判断されるもの」B(2)になることが求められる。実際、学習指導要領の内容自体が削減によって簡単になり、目標そのものが低く達成しやすくなっていることもあるが、教師はクラス全員がこのレベル以上になることを目指しているので、仮に目標水準から判断すると低いレベルだったとしても、相対的に評価基準を甘く設定してしまうこともある。その結果「おおむね満足できる」B(2)がそのまま「十分満足できる」A(3)にすりかわってしまう形に表れることもある。

そのようにしてつけられた子どもの通知表は、「観点別学習状況」では、すべてB、AとBが半分ずつくらいの子が多くなる。オールAというケースも珍しくない。そのうえ、「3段階評定」は絶対評価であるので、よほど学習が振るわないということでない限り2以上の評定となる。つまり従来行われてきた5段階相対評価の3レベルであったごくふつうの子どもの成績は、現在の3段階評定で一番上の3になる可能性もあり、「観点別学習状況」の評価ではAとBが半々くらいという一見かなりよい評価の通知表に

なる。また5段階評定では2が半分くらいあった子どもも3段階評定ではすべて2になり、「観点別学習状況」の評価も30以上ある項目の中の2～3個がCになるくらいで、全体的に悪い印象は薄れ、保護者や子どもにはまずまずの成績に見えることになる。5段階で4以上のレベルであれば、3段階評定はすべて3、「観点別学習状況」もほとんどがAということになり、学校での学びを簡単なものとしてとらえてしまうことにもなりかねない。

また、学校では通知表には子どものよいところだけを書くよう管理職から指導がある。適切でない文章表現があれば書き直しを求められ、差しさわりのないオブラートに包まれた表現になる。子どもたち一人一人のよさを認めるということは教育の最も大切なことの一つであるが、家庭との連絡でよいことだけを双方から伝えあっていたのでは、まるごとの子どもに向かい合うことはできない。子どもはもっと心からのかわりを求めている。

よいところも悪いところもお互いに認め合ったうえでかわりあわないと表面的な人間関係しか結ぶことができず、心を開いて喜びや悲しみを共有することができない。人とのかわりがなかなかできない子どもや大人が増えてきたが、家族の中でも本気でぶつかり合った経験をしたことがない人が増えているのではないだろうか。

4 小学校のこれから

二極化ということがこのごろよくいわれるが、学校現場でも子どもたちの学力の実態は従来考えられていた正規分布曲線ではなく、コブが2つある形になってきていると感じる。これは前述の進学塾に行っている子どもと家庭で何も学習しない子どもの存在が大きい。またADHDなどの学習困難をかかえる子どもが普通学級に多く在籍するようになり、学習不振のみの子どもに対して十分な指導の時間を確保しにくくなっているという学校の事情もある。

まだ教師になりたてのころは、授業はクラス全体にしているという意識であった。1学年40人のクラスが5つというような大規模な小学校であっ

たので、正直一人一人の子どもたちの動静をきちんと把握することはできていなかった。よくも悪しくも目立つ子どもは意識できたが、半数以上の子ども一人一人がその授業でどんなことをしていたかをはっきり思い返すことはできなかった。しかしクラスとしてのまとまりや演奏は、それなりにしっかりできていた。今思えば、十分に授業に参加していなかった子どももいたのであろうが、学級担任の全面的な協力で、未熟な授業技術を補ってくれていた。

経験を積んでからは、全体に児童数は減ってきて、単学級か2学級かというようなケースが増え、その学習条件は1クラスの人数が限りなく40人に近いか20人前半かという大きな差になって現れるようになった。文部科学省はいつまでも40人学級の人数を減らす動きを積極的に見せないが、いまは30年前のように、クラスとしてのまとまりのある40人のクラスではない。子どもたちが対先生の対一の関係をひたすら求める実態では、補助的な教員がばらばらにクラスに派遣されることより、子どもたち一人一人に毎時間きちんと向かいあえる正規の教員の配置がぜひとも必要である。すみやかな学級定員減の実施を求めたい。

新しい学習指導要領が2011年度の完全実施を前に09年度よりの移行措置で少しずつ実施されていく。都会の小学校の問題は、先日参観した四街道市の小学校では全く見られなかった。「子どものためになるかならないかをすべての判断の基本におく」というこの小学校では、子どもたちは規律正しく真剣に授業に取り組み、学年の発達段階に応じてきちんとあいさつしたり、自分の考えをしっかり相手に伝えたりすることができていた。

地域の学校を地域全体で守り育てるという感覚は都会では希薄になりがちで、またそれを助長するかのように競争原理で学校選択制などを取り入れる動きが一時盛んであったが、それも少し落ち着いてきた感がある。

まずは学校が信頼されるために、塾に頼らない学ぶ場としての学校づくりが大切で、そこには地域の人材の活用が欠かせない。

まとめ

天然資源に恵まれない日本の誇れる資源は人である。先日公表された国内総生産（GDP）に対する教育費の割合は世界の中で日本はかなり低いことがわかった。少子化で子どもの人数が減っているので、教育費の割合も下がるのは当然、あるいは効率よい教育が行われているのだという解釈もあるが、ここのところ日本は国として「人こそ資源」という考えを忘れていくように思う。

数年前の建築強度に端を発した偽装問題が、建築だけでなく食品にも広がり、全国あちこちで発覚し、そのたびにテレビ画面に深々と頭をたれる社長の姿が映る。総理大臣は道半ばで職を放棄し、政治家の何人もが失言・罵詈雑言で大臣の職を辞している。

何度も繰り返されるこれらの事件は何が原因なのであろう。自分の仕事に対する使命感・責任感、自負心はないのだろうか。お金さえ儲かればいい。ばれなければ何をしてもいい。みんなやっていることさ。人の心を感じられないまま長い間国会議員をしている。こんな大人を見て子どもたちは健全に育つことができるのだろうか。

「子どものためになるかならないかをすべての判断の基本におく」ことを実践している四街道市の小学校では、いきいきした子どもたちと先生との温かい人間関係を短時間の中にも感じる事ができた。「国民のためになるかならないかをすべての判断の基本に」叡智を結集した政治、「お客様のためになるかならないかをすべての基本におく」経営が当然のこととして実行される社会にすることを何よりも優先しなければならない。

そこには、互いの信頼や相手を思いやる心があり、一人一人が自分の役割を自覚しそれをきちんと果たすという、人としての基本的な構えがある。

大学は社会に出る前の学びの場として学生たちに対して何ができるだろう。

本専攻は一般教養を授け、学生個人の成長を手助けすることだけでその

責務を果たしたとすることはできない。未来を担う子どもたちとともに歩む小学校教員として大切なものを一人一人が感じとり、それに向かって努力し続けられる学生を一人でも多く育てていきたい。

大学での4年間の「学び」は、小学校で教員として勤務する基礎となる。教員が児童・生徒、学生に及ぼす影響は昔に比べれば少なくなったとはいえ、現在でもなお大きなものがある。特に相手が幼い小学生の場合、教員の日常の言動、考え方、価値観などいわゆる人間性すべてが有形無形の形で子どもに大きな影響を与える。このことを考えると特に小学校教員の養成には大きな責任が伴うといえる。少子化でだれでも希望すれば大学に進学できる時代になった。特に何も考えないまま入学してきた学生であっても、この地域こども教育専攻の4年間で、教員という仕事の意味や責任に気づき、教職にかかわる基本的・基礎的な知識を身につけながら、その専門性を自覚し、誠意と情熱をもって子どもたちとともに歩めるよう、最大限の努力を続けていきたい。

(注)

- (1) PISA「Programme for Economic Co-operation Assessment」の略。OECD参加国が世界の15歳児を対象に共同開発した2000年から3年ごとに行っている国際的学習到達度調査。第1回調査2000年には32カ国の26万5,000人が参加（2002年に調査に協賛する11カ国が同一内容で調査を実施したため、43カ国の参加となる）。第2回調査は2003年41カ国27万6,000人、2006年の第3回調査には57カ国40万人が参加した。第3回の詳細は、http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku-chousa/sonota/071205/001.pdf参照。

(主な参考文献)

- 遠藤克弥（2008）『教育の挑戦——多文化化・国際化』勉誠出版
小笠原喜康（2008）『学力問題のウソ——なぜ日本の学力は低いのか』PHP研究所
オリベッカ・ヘイノネン＋佐藤学（2007）『オリベッカ・ヘイノネン「学力世界一」がもたらすもの』NHK出版
齋藤孝（2008）『なぜ日本人は学ばなくなったのか』講談社現代新書
筒井清忠編（1999）『新しい教養を拓く——文明の違いを超えて』岩波ブックレット
廣川洋一（1990）『ギリシャ人の教育』岩波新書

〈参考資料〉 出身高校所在地

K大学

学年		総数	県内	県外	
1年	男子	17	16	1	茨城
	女子	14	14	0	
	計	31 100%	30 97%	1 3%	
2年	男子	15	13	2	東京 茨城 沖縄
	女子	11	10	1	
	計	26 100%	23 88%	3 12%	
合計		57	53	4	
割合		100%	93%	7%	

A大学

専攻学年		総数	都内	都外	
国語3年	男子	9	4	5	神奈川 茨城2 福島 愛媛 埼玉2 千葉 栃木 長野 静岡 宮城 広島 高知 大分
	女子	19	9	10	
	計	28 100%	13 46%	15 54%	
理科3年	男子	17	6	11	神奈川3 埼玉 栃木 群馬 福井2 石川 岩手 広島 神奈川2 茨城 栃木 静岡 高知
	女子	10	4	6	
	計	27 100%	10 37%	17 63%	
合計		55	23	32	
割合		100%	42%	58%	

(注) B大学出身高校資料はない。専任教員や学生の話から都内・関東近県の出身者が大半と思われる。